２０２３年（令和５年）　１月６日　金曜日

デーリー東北　９面　掲載

第63回デーリー東北新春短編小説 特別賞

たまご焼き

佐藤千恵子

題字・杉本　敦子（八戸市）

わたしの名前は「ちさと」小学5年生。3年生の終わりごろから「コロナ」になって、コロナになってから給食があったりなかったりで、ない時はうちからお弁当を持って来なくちゃいけない。食べる時も黙って食べなくちゃいけないし、つまらない。母ちゃんは忙しいからって、わたしのお弁当はかまぼこや昨日のおかずの残りが多い。

それに比べて後ろの席のたか子ちゃんのお弁当には、いっつも色々なものが彩りよく並んでいる。たまご焼きやウインナー、それからハンバーグの時もあった。特にあのたまご焼きは、本当においしそうだ。あの黄色がいい。で、真ん中に白身がちょっとあって、それを芯にしたような感じでくるくる巻いてある。そして、ほとんど毎日、たか子ちゃんのお弁当にはそのたまご焼きが入っている。一回でいいから、あれを食べてみたい。ずっと思っているんだけど、いくら仲よしだからっていっても言えるはずもない。たか子ちゃんだって、きっとたまご焼きが好きなんだと思う。いつもお弁当の最後に食べてるのを見たことがある。その時、たか子ちゃんに思いきって聞いてみた。

「そのたまご焼き、甘いの？　それともしょっぱいの？」

って。そしたら、

「甘いよ、今日のは」

って答えてくれた。ということは甘くないたまご焼きの日もあるんだ。そういえば何か緑色のものが入っている時があって、

「それ、なあに？」

って聞いたら、ほうれん草って言ってた時もあったし、その前はのりで巻いてた時もあった。たか子ちゃんのたまご焼きはほんとに色々で見てるだけでもワクワクする。きっとお母さんは料理が上手なんだろうなぁ。

でも、どっちかって言うと、わたしは白身が芯になってる黄色のたまご焼きがいい。それも甘いたまご焼きが食べたいって思っている。いつだったか、ずっと前に家族みんなで回る寿司を食べに行った時に食べたたまご焼きの味に似てるのかな、なんて考えてしまう。

それで、夕飯の時に母ちゃんに聞いてみた。

「あのさぁ、お弁当のおかずなんだけど、たまご焼きがいい」

ドキドキしながら、やっと言ったのに、

「卵はダメ」

の一言で終わった。

まっ分かってた答えだけどさ、いっつもこれで終わり。うちは母ちゃんが何か宗教に入っていて、それで神様には動物の肉とか卵はお供えしないから食べるのもダメって言ってる。でも、いつだったか肉も魚も高くなって、上がらないのは父ちゃんの給料だけだねって言って父ちゃんとケンカしてたけど。そのせいかおかずは魚が多い。っていうか、カレーの時でさえも肉じゃなくて、前の日の残りのマグロが入っている。たまにイカやエビとか、ホタテの身じゃなくて耳の時もある。

そうそう学校でホタテの耳って言ったら、たか子ちゃんや隣のアッシくんたちに笑われた。

「それ、耳じゃなくてヒモ！」

「うそぉ、うちじゃ耳っていうけど」

「ヒモっ！」

だって。知らなかった。ずっと耳だと思ってたから、みんなに笑われたのはショックだった。で、この間図書館で調べたらどっちもありだった。ついでに料理の本を見ていたらシーフードカレーというのを見つけた。エビやイカが入ってるカレーのことらしい。それを見た時は、うちのカレーはこれかと思ったけど、何か違う気がした。だってホタテの耳だよ、耳。いくらシーフードカレーでも、やっぱカレーは肉でしょ。給食で食べる普通のカレーが絶対いい。でも、そんなことは言えない。特に父ちゃんがいる時は大体にして食べ物のことで何か言ったら絶対叱られるし、父ちゃんは

「文句があるなら食うな！」

って吠える。だから、我慢して食べるしかない、何でも。

夏休みが終わっても、お弁当の日は相変わらず続いている。わたしのお弁当はさつま揚げやウインナー、かぼちゃやひじきの煮物が多い。

ああ給食がいいなぁ。給食が食べたい。そう思いながら、その日も黙食をしていると後ろでたか子ちゃんの声がした。

「あっ…」

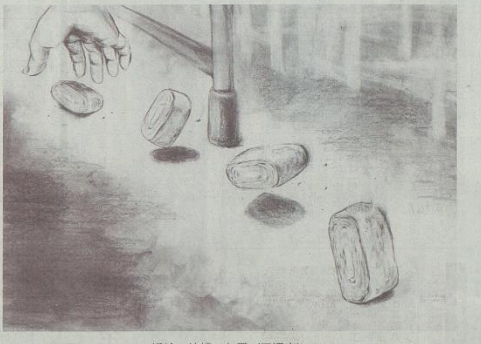
振り向いたのと同時に、わたしの机の下にあの黄色のたまご焼きがころころ転がって来た。たか子ちゃんがそれを拾おうとしゃがみ込んだ瞬間、わたしがそれより先にしゃがんで手を伸ばし、サッと拾って、口に入れてしまった。

うわぁ、おいしい！　甘いたまご焼きだぁ。

机の下でたか子ちゃんと目があった。びっくりしてた。でも、何も言わない。で、ごっくん、と飲み込んでしまった。立ち上がりながらたか子ちゃんを見ると、今度は唇をぎゅっとしてる。怒ってる感じ。どうしよう⁉

「ご…めんね」

座りながらたか子ちゃんに言ったけど、何も言わない。お弁当を片付けている。他の人は誰も気づいていないようだ。でも、落としたものを拾ったんだから食べたって悪いことじゃない。いや違う。拾ったものは落とし主に返さなくちゃいけないんだ。でも、返したって、落ちたものをたか子ちゃんは食べる？　いや食べないと思う。たぶん、持って帰って捨てるでしょ。じゃ、もらってもいいんじゃない？　そう思って、また後ろを振り向いたら、たか子ちゃんは不思議そうに聞いてきた。



挿絵・柏崎　七愛（三沢市）

「落ちたもの、食べるの？」

何も言えなかった。怒っているようにも見えるけど、何かわたしに聞きたそうな顔で見てる。でも、それ以上は何も言わず、教室から出て行ってしまった。誰かにこのことを教えに行ったのかもしれない。もしかしたら先生に言いに行ったのかも。いや、たか子ちゃんとは仲よしだけど、帰りの会でみんなの前でこのことを言うのかもしれない。帰りの会は、その日にあったできごと、たとえば嫌だったことや嬉しかったこと、良かったことなどを発表して、それについて意見を言うんだけど、きっとわたしはみんなの前で笑われたり、バカにされたりするに違いない。どうしよう…、どうしよう！

そんなことを考えていたらだんだんお腹が痛くなってきた。算数の授業もぜんぜん頭に入らなくて、授業が終わってから担任の田中先生に言って、保健室へ行かせてもらった。保健室の先生は色々聞いてきたけど、お腹が痛いって言ったら、ベッドで休むように言ってくれた。ベッドに入って布団をかけてもらったら涙があふれてきた。涙は、しょっぱかった。

「ちさとさん、起きなさい」

いつの間にか寝てたらしい。

田中先生の声で起こされた。

「具合はどうかな？　お腹が痛いのは治った？」

「あ…はい」

「じゃ、おうちへ帰れるかな」

「はい」

「じゃ、教室へ戻って荷物を持って、帰っていいからね。気をつけて帰るんですよ」

先生はそれ以上何も言わなかった。

田中先生と保健室の先生に挨拶をして教室へ戻ると、掃除当番の人しかいなかった。たか子ちゃんもいなかった。先生も他の人もたまご焼きのことは誰も何も言わない。今日はそろばん塾へ行く日なので、そろばん塾へ向かった。でも、そろばんをしていても、頭の中はたまご焼きのことばかり考えてしまい、間違ってばかりだった。わたしがいなかったから、明日の帰りの会でたか子ちゃんは言うのかもしれない。

「ただいまぁ」

「あらたか子、お帰り」

たか子ちゃんはうちに帰ると、お母さんに声をかけて手洗いとうがいをしてから居間に入っていった。お母さんは洗濯物をたたんでいた。

「学校、どうだった？　コロナの人とかいない？」

お母さんは、近頃それを一番に聞いてくる。

「ん、大丈夫」

「それはよかった。毎日毎日、コロナのニュースばかりだし、小さい子でもコロナにかかってるっていうから心配だよね」

「ん。あのさ、お母さん、今日さ学校でね、お弁当のたまご焼きを落としちゃって」

「あらら、何してたの？　また、おしゃべりしながら食べていたんじゃない？」

「ないない。給食は黙食だから、おしゃべりしちゃダメなの」

「あっそう。じゃあ…？」

「お母さん、今日オクラを入れてたじゃん、それで箸がすべったんだと思う」

「そっかあ。それは失礼しました」

「で、落ちたたまご焼きを拾おうとしたら前の席のちさとちゃんが、それ食べちゃった」

「落ちたのを？」

「そう」

たか子ちゃんはお母さんにその時の話をして、6時間目からちさとちゃんが保健室へ行ったまま教室へ戻ってこなかったことも話すと、お母さんはちょっと何かを考えているような感じだった。が、思いきって言った。

「明日さ、ちさとちゃんの分のたまご焼きを作ってちょうだい」

「はぁ、なんで？」

「だって食べたかったんだと思うよ、ちさとちゃんは。いっつもわたしのお弁当を見てるもの。そのたまご焼き、甘いのとか、ほうれん草が入っているのを見た時は何が入ってるのとか聞いてくるし…」

「そうなんだ。おうちでたまご焼きを食べないのかな？」

「ん。そうみたい。いつだったか、お母さんがダメって言うとか、聞いたことがある」

「へぇー、そうなんだ」

「だから、持って行って、落ちたやつじゃなく、ちゃんとしたのを食べてもらいたいの。それに、落ちたのはゴミとかついてたと思うし、それを食べたちさとちゃんが何だかかわいそうなんだもの。ねえ、お母さんいいでしょ？」

それには答えずに、お母さんは聞いてきた。

「ちさとちゃん、その時何か言った？」

「ごめんって言った」

「そうなんだ。じゃ、もういいじゃない？」

意味が分からなかった。

「どういう意味？　お母さん」

「たぶんね、ちさとちゃんは拾って食べたことで恥ずかしくなったんじゃないのかな。だからって、持って行ったらもっと嫌じゃないかな。何だかたか子からもらったことで、たか子に借りができるっていうか、ずっとたか子の言うとおりにしなくちゃって思うかも」

「ええっ、そんなことは考えてみたこともなかったけど」

たか子ちゃんは考えた。お母さんに言われたことを自分に置き換えて考えてみた。

「コロナになってから給食がなくなって、周りの人がどんなお弁当を持って来てるか、たか子も楽しみって言ってたじゃない。でも、こんなに続いたら、いつも同じお弁当の人もいるだろうし、もしかしたら持って来れない人も中にはいるかもよ。ちさとちゃんのおうちがどういうおうちなのかは、お母さんは分からないけど、今は持って行ってあげるのはやめよう。たとえばさぁ、遠足の時とか一緒にごはんを食べる時にご馳走してあげるのはありじゃないのかな」

「あ、それいいかも。それだと普通にちさとちゃんにも食べてって言える」

そう言いながら、ごめんって言った時のちさとちゃんの顔を思い出した。何だか困っているような、今にも泣きそうな顔だったっけ。

翌日、学校へ行くとわたしはたか子ちゃんに謝ることにした。

「昨日はごめんなさい」

「何のこと？」

たか子ちゃんが聞いてきた。

わたしは、隣の席のアッシくんに聞こえないように小さな声で

「たまご焼き」

と言ったら、たか子ちゃんは普通の声で

「ん。転がって、どっか行っちゃった。だから、ちさとちゃんも気にしなくていいから。それより昨日の算数の宿題やってきた？」

と、宿題のことに話を変えた。

そして、

それっきり、たまご焼きの話はしてない。

喜びの声

歳を重ねるにつれ、亡くなった両親のことや子どもの頃のことを思い出すようになった。今回はそこからヒントを得て想像を膨らませ、初めて児童文学的な内容に挑戦してみた。書きながら、懐かしい時代にタイムスリップしたような気がした。おかっぱ頭のたか子ちゃんや、坊ちゃん刈りのアッシくん。思い出は次々と頭の中を駆け巡り、思わず涙があふれた。

コロナになって行動が制限され、できないことが多くなった。が、仕事の合間に図書館へ出かける楽しみが増えた。そして、また原稿用紙に向かうようになった。今回の受賞を励みとし、書き続けたい。

略歴

さとう・ちえこ　1953年、青森市生まれ。東北女子短大卒。2008年に八戸短大ライフデザイン学科准教授、18年から八戸学院大健康医療学部人間健康学科准教授。管理栄養士。16年に八戸市で初の子ども食堂を開設、周知・拡大に努めている。05年にも特別賞。同市在住。

デーリー東北新聞社提供